

# コミュニティ心理学的アプローチによるニューカマー児童の支援 — S-HTP 法を用いた実践 —

竹山典子\*, 今田雄三\*\*

(平成21年6月18日受付, 平成21年12月4日受理)

## The Community Psychological Approach for Supporting New Foreign Children in Japan :

Implementing with Using S-HTP Drawings

TAKEYAMA Noriko\*, IMADA Yuzo\*\*

In recent years, the number of foreign children has increased in Japan; further, the length of their stay has tended to be longer. In this study, S-HTP drawings were used to investigate psychological problems new foreign children who attended a Japanese language class somewhere in Japan. From their drawings, we found that the psychological issues pertaining to the children and presented feedback based on the results to the volunteers of this class. We focused on Latin American children from whose drawings it was evident that they suffered from some psychological instability. Subsequently, we inferred that the language class and the volunteers played important roles as psychological supports for the children, and S-HTP, the clinical psychological technique, was useful for non-psychological experts to accelerate their understanding of foreign children. Moreover, our commitment materialized as a practical model for constructing the systematic psychological support from the viewpoint of a community psychological approach.

Key words : community psychological approach, new foreign children in Japan, S-HTP drawing

### I 目的

1990年6月の出入国管理及び難民認定法の改正施行以降, 日本国内にニューカマー(新来外国人)と呼ばれる外国籍住民の流入が拡大し, 外国人滞在者の多様化が進むとともに定住化傾向が強まっている。「ニューカマー」という言葉に明確な定義はないが, 一般的には, 1970年代以降, 日本に居住することになった人々に対する呼称であり, 旧植民地出身者である在日韓国・朝鮮人や在日中国人を指す「オールドカマー」(旧来外国人)と区別して使用される<sup>(1)</sup>。彼らに随伴して来日する子どもたちも増加し, 受け入れ側の日本の公教育機関も変化せざるを得ない状況が指摘されている<sup>(2)(3)</sup>。こういった子どもたちは言語や教育上の問題を多く抱えざるをえないが<sup>(4)(5)</sup>, 昨今では心理的な問題も報告されている<sup>(6)(7)</sup>。例えば, 滞在期間や進路等の将来展望が不透明であることによる不安定な精神状態, 日本語が話せるようになった子どもと話せない親との間で, 役割の逆転, 親の権威の喪失等が起ることによる家族関係の悪化, 日本語コミュニケーション不全による学校でのいじめや孤独感の

増長, 学習困難による自尊感情の低下等が挙げられ, 心の支援の必要性も指摘されている<sup>(8)(9)</sup>。こういった, ニューカマーをはじめとする在日外国人の子どもの支援では, 日本語教育等の分野において, 地域支援者ネットワークの有効性が指摘されている<sup>(10)(11)</sup>。しかしながら, その中に, 心の支援への言及は散見される程度である。

心理査定の一環である描画テストは, 実施が簡便で, 広い年齢層に適応できること, また言語では表現できない, またはしたくない心の世界が投影されやすいことから, 子どもや言語コミュニケーションが難しい被検者の心理査定として適しているとされる。先述の子どもたちの場合, 日本語によるコミュニケーションが困難であることが多い。描画テストの中でも, 統合型HTP法(S-HTP法: Synthetic-House-Tree-Person drawing)は, 家族関係や生活環境に関する課題が表れやすいとされている<sup>(12)</sup>。箕口ら<sup>(13)</sup>は, 中国帰国者の子どもたちの適応過程をS-HTP法を導入して縦断的に調査し, 描画的表現技法が, 移住動機の希薄な児童期の子どもたちが, 異なる文化圏の移

\*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

\*\*鳴門教育大学 (Naruto University of Education)

住にともなって自己の同一性をどのように形成し達成していくのかを把握するうえで、きわめて有用な方法で、ホスト側に、援助的にかかわりに重要な示唆を提供してくれると述べている。また、田中ら<sup>(14)</sup>は、南米出身者を中心とする在日外国人児童と南米在住の児童にS-HTP法を施行し、在日外国人児童の描画特徴として、地面を描くことが少なく、宙に浮く人物を多く描くこと、攻撃性の高い絵を有意に多く描くこと等をあげ、家族の支援の必要性を指摘している。

小論では、臨床心理的地域援助の視点から、筆者らが異なる文化的背景を持つ子どもの支援団体と共に、昨今増加しているニューカマーの子どもの心の問題とその背景への理解を深め、有効な支援方策を探るために実施した、S-HTP法を導入したコミュニティ心理学的アプローチについて検証する。

## II フィールドの概要

X県Y市は古くから外国人在住者が全国的にも多い地域で、昨今Z町では、日系南米人を主とする外国人労働者が増加傾向にある。地域支援団体Pは、多様な社会や文化的背景を持った子どもへの支援を目的に2002年に開設された。支援活動は、公的施設を支援教室に利用し、日本人ボランティアが日本語および学習教科を、週2回、1回2時間、1対1の担当形で支援している。1回の支援ごとに、子ども一人ひとりの支援内容をホームページ上の掲示板に更新し、曜日ごとに月1回の打ち合わせを行うなど、支援者間で子どもたちに関する情報共有を積極的に行っている。また、半年に一度保護者会を開き、子どもたちの家庭・学校等での様子の情報交換に努めながら、保護者と養育に関する話し合いも実施している。調査時、Pには子ども（幼稚園児から中学生年齢）が15名在籍し、日本人ボランティア25名と有償のコーディネーター2名が支援にあっていた。子どもたちは日系南米人の他に、留学生の子弟、中国系コミュニティの子ども、海外赴任中のビジネスマンの子弟等、来日経緯や文化的背景は多様である。ボランティアの内訳は、大学生・大学院生、日本語教師など教師経験者、及び、近隣住人で、外国語が話せる者も多い。団体の運営費用は、会費、助成金、寄付金、受益者負担金で賄われている。

筆者の一人は、Pの子どもたちが、日本への適応過程で心の問題を抱えていないか、また、地域支援者らが彼らにどのように関わり、支援を実施しているのかを探るため、X-1年8月から約8ヶ月間、月に2~3回、定期的に支援教室を訪問し、参与観察と支援者への聞き取り調査を実施していた。その間、文化的背景に違いはあるものの、多くの子どもたちが日本語による自己表現やコミュニケーションに不自由を感じていること、学校で不適応状態にある子どもが多いこと、更に、家庭環境が

複雑で、経済的に恵まれていない子どもが多いこと等が明らかになった。同時に、Pの支援者からは、学習支援の他に心の支援の必要性を指摘する声も聞かれた。このような経緯を経て、コーディネーターから筆者らに、心理的な支援者として団体へ関わって欲しい、との依頼があった。

## III 方法と対象

X年4月~X+1年3月の間に、Pの支援者らが「気になる子」とする10名の子どもそれぞれに対し、S-HTP法を通常の支援活動中に3~4回ずつ、1学期間に1回の割合を目安に実施した。これは、子どもたちの学習時間を妨げないため、また、担当ボランティア（以下、担当者）が子どもに精神的に不安定な様子を感じ、施行を依頼する時期が、各学期の開始頃であることが多かったためである。筆者らの定期訪問は継続され、支援活動を補助することもあった。そのため筆者らは、心理的支援者且つPの積極的参与者<sup>(15)</sup>と関係者に捉えられていたと考えられる。Pの支援者に、描画テストの趣旨、臨床心理学的意義、S-HTP法の実施法を理解してもらうため説明の機会を得た後、実施の同意を得た。同時に、保護者と子どもたちに描画テストの実施と目的を告知するため、関係者らの協力を得て各国語で案内を作成、配布した。実施の際は改めて対象の子どもの保護者に了解をとった。施行は支援教室内で筆者と子どもの1対1を基本にしたが、担当者とのラポールが強い子どもには、担当者に横についてもらい、筆者が教示後、机間巡視して様子を見守った。その際、担当者に子どもの描画時の様子やPDI（Post Drawing Interview）を記録してもらった。教示は三上<sup>(16)</sup>に習い、「家と木と人を入れて、何でも好きな絵を描いて下さい」とした。実施後、筆者の1人が絵を持ち帰り、もう一方の筆者と共に解釈を熟考し、解釈がまとまり次第、担当者とコーディネーターに個別にフィードバックを実施した。その際、筆者らは一方的に解釈を伝えるのではなく、担当者らから、描画の印象、子どもの近況、家庭状況、気になる出来事等を話してもらい、相互に子どもの絵を味わい、彼らの心情の理解に努めた。その後支援方針を話し合い、必要であれば保護者に気になる点を報告し、子どもの心の問題の共通理解を図った。また、筆者らの支援の評価を知るため、質問紙調査を併せて実施した。実施時期はX+1年5月末、対象は査定対象となった子どもの担当者とコーディネーターとし（N=12）、描画テストの方法や回数、フィードバックについての選択式および記述式の質問への回答を求めた。

小論では、Pのニューカマー児童のうち継続調査が可能であった2名の描画作品と支援過程を取り上げる。

#### IV 事例

事例中の凡例は、「」は児童、<>は筆者、『』、（）はその他、エピソードは参与観察やフィードバック時に得た情報とする。なお、作品中のプライバシーに関わる表現は削除している。

##### 1. 児童 A

小学6年生女兒。出身は南米。母語はスペイン語。両親の離婚後、母親が日本在住の親戚を頼って来日。その間、Aは母国で祖母と暮らしていたが、母親に呼び寄せられ、X-3年来日、公立小学校に3年生途中から編入。母親はY市内で、外国人労働者が多く働く製造業の工場に勤務。同胞はなく、母子二人暮らして関係は良好。臨床像は、色黒で細身、長い手足、目鼻立ちがはっきりしており、同年代の日本人と異なる印象を受ける。第二次性徴が始まり、身体は丸みを帯びつつあった。描画テスト第1回目の約1週間前に初潮を迎えた。おしゃれや男の子の話題に関心が高く、ヒールの靴や身体のラインがはっきりする女性らしい服装を好んだ。ダンスが得意で、将来の夢は歌手か助産師。女性担当者とは大変仲が良く、支援中はおしゃべりを楽しむ。性格は几帳面でマイペース。来日直後は、学校で母語による学習支援が1年間あったが、その後の支援はない。描画テスト施行時は、日本語の日常会話に困難はなく、学校適応も順調で、友人も多かった。しかしながら、学習面では国語も算数も小学校3、4年生程度で、年齢相応の学力には至っていなかった。母親との会話は母語だが、母語での学習は困難で、別の曜日にP主催の母語教室に通っていた。

担当者から、「母親の生活への不安がAにうつっている」という訴えがあり、目に見える不適応状態はなかったが、描画テストを実施することとなった。施行の際は、Aは担当者とのラポールが強いため、筆者の教示後、担当者が隣に着席して描画を見守り、筆者は机間巡視して様子を観察した。なお、日本語による教示の理解に問題はなかった。

##### 【1回目：X年5月中旬】

なかなか描き始められず、「どうして絵を描くの？」と何度か質問した。<Aのことをもっとよく知りたいから>と答えると、照れた笑みを浮かべた。また、「家はなくてもいい？」と聞いたが、描き始めると、鼻歌を歌い楽しそうな様子を見せた。所要時間は約100分。

##### 1) 描かれた絵の風景や課題の説明（児童A作品①）

場所の説明はなく、「良い天気、虹が出ている。友達が走ってきている」。並木道の奥の友だち2人を、頭にヘアバンドをつけ、後ろ向きで手を振り、迎えるA。家の窓からAを見ている「ママ」。「めっちゃ大きい木が遠くにある（道の奥。ドアがあり、友だちの家になってい

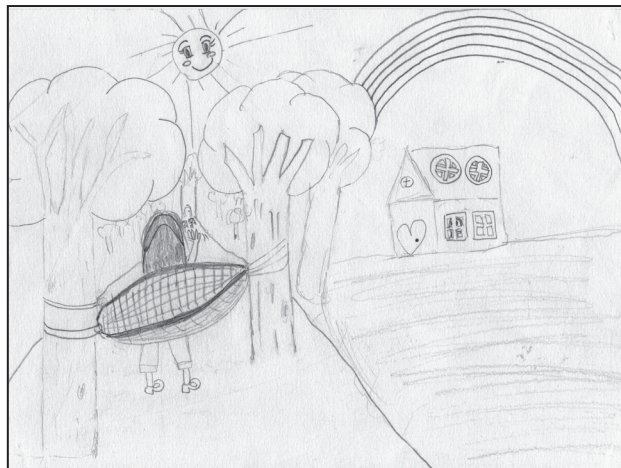


図1 児童A作品①

る)」。並木道の手前の二本の木にハンモック。祖母宅近辺で使ったことがあると話した。家は「ママと2人で住んでいる。日曜日だからママが家にいる」。

##### 2) 印象

太陽が輝き、空には虹が架けられ、全体の印象は明るい。家は画用紙の右奥にポツンと描かれ、構図的に左右の繋がりが悪い。窓の格子から覗く母親は、多忙で、Aと過ごす時間が少ないことを推測させる。木の洞のような表現は外傷体験<sup>(17)</sup>を推測させ、身体を包む母性的なアイテムのハンモックと併せ、母親への愛情希求と退行が感じられる。また、ハンモックに包まれた身体は外からは見えにくいことから、Aの恥ずかしがり屋な面、もしくは、思春期の照れといった心性も感じられる。

##### 3) フィードバックと地域支援者との協働

筆者らは担当者らに、Aの母親への愛情希求、思春期の心性、良好な友人関係、後ろ姿のA等についての解釈を伝える。担当者らはこれを受け、この頃のAの家庭の事情や母子関係について語った。Aは恥ずかしがり屋で人見知りする一方、支援中は担当者に甘える様子を見せること、母親とは深い絆が感じられるが、母親の家庭の経済的な苦しさによる不安をAが強く感じていること等が聞かれた。学校での友人関係は良好で、親友や恋愛の話をよくする等の情報を得た。担当者らからはフィードバックに関して、「普段気がついていない側面を指摘された」と、特に母親との関係についての感想が述べられた。以上から今後の支援方針を母親に関するAの語りを傾聴し、家庭状況に配慮した声かけを実施すること、支援中の甘えを共感的に受容し、学習を強制せず、支援時の心境に沿った学習支援を実施すること、とした。

**エピソード1：**夏休み中、P主催のキャンプに参加したAは、参加者の日本人児童数名から、『日本人だと思った』と言われ、「めっちゃ嬉しい」と喜んだ。

**エピソード2：**9月末頃、近隣に引っ越したが、Aは担



当者らに話していなかった。また、10月中旬の修学旅行が近づくとも旅行準備を楽しんでいた。

## 【2回目：X年10月初旬】

1) 描かれた絵の風景や課題の説明（児童A作品②群）

3 作品描いた。所要時間は3枚で55分。

作品②-1：顔しか描きたくないと言い、鏡で自分の顔や髪を観察しながら描く。Aが髪に手をやり、シャワーを浴びているが、身体は棒状。うまく描けず、画用紙を裏返して、描き直した。

作品②-2：引き続き鏡を見ながら丁寧に描く。しかし、「〇〇先生（担当者）になった」と、上着に担当者の名字を描いた。担当者が家と木がないことを指摘すると不機嫌そうに簡単に描いた。担当者が5歳の頃。

作品②-3：画用紙をもう1枚要求し、担当者にポーズを取らせて人を描く。森の中、季節は秋。誰かが女性を写真撮影中で、女性はVサインで応じている。家は道の奥、「(画用紙の)7~8cm向こう」。人は担当方で、担当者の実年齢とは異なるが、「25才」と記す。

2) 印象

作品②-1は、描画中、自分の裸身を描かねばならないことに気づき、途中で筆を止めてしまったよう。人の表情は幼い。作品②-2では、服に担当者の名前を描き、顔と身体が別々の人物になった。風船だけが「5才」相応で、ピアス、長い爪、流行の洋服、ヒールの靴等からは、成人女性への憧れと、成長過程の受容の困難が滲み出ている。作品②-3では「25才」の担当者が描かれた。体型のバランスは整い、女性的な身体特徴が表現されたが、全体像を画用紙に納め切れない。洞のある正面の左右2本の木は、作品①同様、母性希求を想像させる。遠くまで続きそうな並木道は、幹だけが太く高く描かれ、Aの潜在的な心の豊かさがうかがえる一方、その奥深さや闇が感じられる。日本に移植され、まだ根を張ることのできない感覚をA自身が抱えているようでもある。写真撮影という説明は、近づく修学旅行を想像させるが、同時に、母国の風景への懐古も感じさせる。ファインダーを通した家のない風景は、家族との団らんが、旅行と同様、この頃のAには非日常であることを想像させる。

3) フィードバックと地域支援者との協働

筆者らは、絵が3枚描かれたこと、担当者が描かれたこと等について担当者らに感想を聞き、話し合いの時間を多く持った。担当者らからは、Aの第二性徴による急激な身体の変化を気に掛けていたこと、また、Aがこの頃から、好んで女性らしい服装をすることから、奇抜な服装への注意を促していたこと等が話された。そのため、身体変化の受容がスムーズではないのかもしれないという筆者らの印象は、担当者らに大きな関心を持って受け入れられた。担当者が女性性のモデルの役割を果た



図2 児童A作品②-1



図3 児童A作品②-2

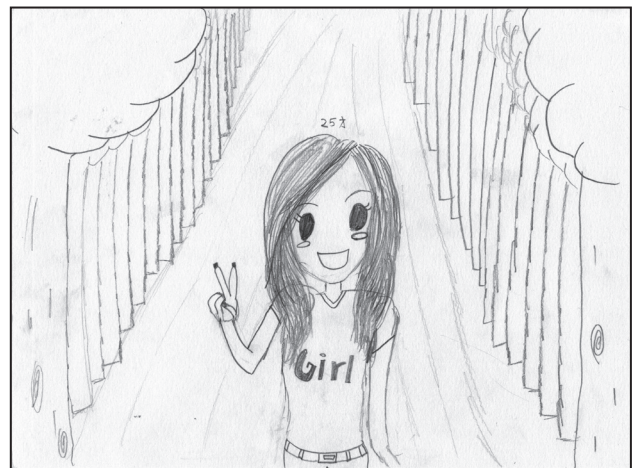


図4 児童A作品②-3

しているのではないかと解釈には、Aが担当者をよく観察していることへの驚きと、Aからの信頼を強く感じていたこと等が話された。今後の支援方針では、改めてAの思春期心性への配慮があげられた。また、担当者からは、母親とは違う、「日本で生活する、身近な大人の女性」としての支援姿勢のあり方を考え、これまでで

上に責任感をもって支援に関わりたいたいといった感想が述べられた。

**エピソード3：**X年12月中旬，母親が怪我で2ヶ月程働けなくなった。その頃Aは，大好きなチョコレートが家にないと言い，クリスマス会も楽しめないでいた。

**エピソード4：**X+1年1月中旬，突然Aが外国人生徒を別枠で受け入れている中学校を受験すると言い出した。結果は不合格だったが，元気そうな様子を見せていた。筆者が2月中旬に中学への進学について尋ねると，「めっちゃ楽しみ！」と元気よく答えた。

### 【3回目：X+1年3月初旬】

#### 1) 描かれた絵の風景と課題の説明（児童A作品③）

題目は『中3のとき』。春の良い天気。森の中の「ラブでハートだらけな家」の庭にハート型のりんごの実のなる木。籠の中に実。屋根の上の中学3年のAと，「優しく，楽しく，おもしろい誰か」が一緒にりんごを食べ，2人でこの家に住む。左側のドアは入口，右側は出口。左下はAの署名。所要時間は約20分。

#### 2) 印象

明るく，気分の高揚感が感じられる。男女のペアはAと将来のボーイフレンドを想像させる。木は実をたわわに実らせ，恋愛に対する前向きで豊かな想像力，恋に恋する思春期の心情がうかがえるが，影が暗さを醸し出す。家は大きく，一見かわいらしく描かれたが，基線のない地面から細い柱や，二つのドアに備え付けられた高さと段数がちぐはぐな階段からは不安定感を否めない。これら非現実な課題の描写は，Aが想像の中に逃げ込んでいるように感じられ，中学生生活を夢みながらも，進学不安を覆い隠しているようでもある。

#### 3) フィードバックと地域支援者との協働

母親が怪我で仕事に行けなくなった頃，担当者とコーディネーターが母親への電話連絡や家庭訪問を積極的に行い，家庭状況の把握に努めた。また，筆者らは，母親の体調への不安や，そこから派生される進学不安を傾聴し，学習の強要は避けることを提案した。受験への支援では，通常支援日以外にも支援を実施し，受験後は本人からの結果報告を待った後，進路の話し合いを持つことを提案，実施した。描画の印象では，担当者からは恋愛への憧れが語られるが，筆者らは進学不安と家庭への思いについても付け加えた。それを受けて担当者からは，Aが中学校生活へ期待を抱きつつも，度々制服や希望する運動部の費用等の家庭の経済事情を心配し，進学後の学習不安も口にするが多くなり，学校の宿題以外に中学生用の教材を持参していることが語られた。そのため，筆者らと担当者で改めて家庭の事情，学力等の課題を確認し，方針を話しあった。結果，学力への不安が拭えないことから，春休み中にも学習支援を実施し，



図5 児童A作品③

Aの様子を観察しながら，進学への不安の傾聴や相談への対応を実施した。

### 【児童Aへの支援過程と心の風景】

支援開始時，児童Aには顕在化した不適応症状はみられなかった。そのため筆者らは，担当者らが訴えたような，家庭の経済状況を要因とする不安，母子関係等の「気がかりな点」に注意を払い，必要な支援を見極めることを心がけた。参与観察や描画作品から，筆者らも担当者らと同様の印象を受けるようになった。来日後，言葉や慣習の違いから自分の異文化性を意識せざるを得ない状況に加え，不在の多い母親との裕福とはいえない生活は，10歳に満たなかったAには苦境であったと考えられた。そういった環境での不安や母子関係は初回の描画に表現された。日本での生活に慣れてからも，学校生活では学習面での課題も多く，また，母親からは帰国予定等の明確な将来の提示はなく，母語教室にも通うAにとって，日本での生活がどのように意味づけされているのが懸念された。また，調査開始直前に初潮が始まるなど，思春期という発達課題，中学校進学に伴う学力の問題，文化的アイデンティティ等，多くの課題を抱えていることが描画から見て取れ，心の支援の必要性が感じられた。

作品①は，家庭への愛情希求がテーマであると感じられたが，その一方で，母親との良好で安定した関係をAが内在化できているからこそ，こういった表現が可能であるとも考えられる。左側はAの心の豊かさを感じさせるが，現実を表す右側は空白が多く，希望を表す虹は生活面の空虚さを一層感じさせる。作品②群は，思春期の自分との対峙がテーマであろう。容姿へのこだわりが強くなったと同時に，第二次性徴による身体の変化を受容仕切れず，その戸惑いが3枚の絵を描くことでさらに強く表現された。担当者が描かれたのは，女性性のモデルとしてその存在が強く意識され，自分では扱いきれな



い身体の成熟も、彼女を描くことで腑に落ち、表現を収めることができたとも考えられた。また、人物は数年後のAの姿とも考えられたが、家を描かなかったことと併せ、明確な自身の将来像を描くことの難しさを感じさせる。一方、作品①で後ろ向きだった人物が前向きになったことから、Aの自我の成長を感じる。作品③も思春期の課題の一つ、異性への関心がテーマであると考えられる。屋根の上に人が座っている風景は温かい家庭への切望を変わず感じさせるが、男女を描くことで、家庭愛への飢えを恋愛という別の愛情対象で補完しようとしているとも捉えられる。同時に、屋上の人や梯子からは現状から這い上がろうとする気持ちを感じられる。これは、受身的な生き方では欲する物が得られないというAが日本で実感してきた感覚が、希望を掴みとろうという強い意志として表現されたとも考えられる。我慢を強いられる苦しい生活の中、健気に生きるAの姿は左端の小さく孤独に咲く鉢植えの花のようでもある。しかしながら、植木鉢の中では地面に根付くことはできず、未だ日本で異文化性を感じ続けていると想像される。

当初Aは描画に戸惑いを見せていたが、一連の作品群を振り返ると、Aの内面が自由に表現されていることが感じられる。作品そのものが与える印象、筆者らの解釈、参与観察の印象を含めた臨床心理学的な見立ては、担当者らに日頃から感じていたAのパーソナリティ、母親との関係、家庭環境等に加え、通常の支援活動では気づきにくい思春期の心性、Aと担当者自身との関係性、Aの内面の奥深さ等への新たな気づきを与えたと考えられた。その結果、描画法の導入がより深いAの内面理解と支援活動に役立ったと考えられた。

## 2. 児童B

小学3年生男児。南米系の血筋だが、母親はBを米国で出産。そのため、自分のことを「アメリカ人」と自慢げに言うことがある。母語はスペイン語。X-7年頃、家族で来日。家族は両親、長姉、兄、次姉、B。両親と兄（高校中退）は工場労働者で、2人の姉は結婚し、近隣に在住。日本に親戚が多い。兄と次姉は中学卒業までPに通っていた。公立小学校に入学後、1年生途中から2年生の終わり頃まで、次姉の出産に付き添い一家で米国に引っ越した。その間Bは学校教育を受けていない。両親は子どもたちの教育に熱心とは言えず、義務教育で無償の間は行っておけば良い、という考えで、Pへの受益者負担金も数年間滞納している。臨床像は、小柄で浅黒い肌、大きく丸い目、笑顔が愛らしく、元気。スポーツタイプの自転車を飛ばして支援教室にやって来て、新しい玩具を持参しては他の子どもたちに見せびらかす。学習中は集中力が続かず立ち歩きが多い。学校ではすぐに切れ、喧嘩をして手を挙げるため友人が少ないが、支

援教室では周りの子への優しさや気遣いが見られる。将来の夢は警察官。日本語の日常会話は問題ないが、読み書きは小学1年生の漢字が読める程度で、学年相応の学力には達していない。学校からの配布物や担任が書き込む連絡帳の理解が両親とも困難で、支援教室に持参し、ボランティアの協力でなんとか学校生活を切り抜けている。別の曜日にはP主催の母語教室にも通っている。

担当者から、教室でのいたずらが増え、注意を受けると汚い言葉で言い返す等、粗暴な行動が目にするため、描画テストを依頼された。S-HTP法の施行は、担当者よりも筆者の方がゆったりと落ち着いて取り組める様子であったため、今回とも筆者が施行した。なお、日本語による教示の理解に問題はなかった。

### 【1回目：X年5月中旬】

何を描いたらよいか何度も確認し、筆者以外に絵を見られるのを嫌がった。また、きちんと描きたいという気持ちからか、各課題をノートに下書きした。

#### 1) 描かれた絵の風景と課題の説明（児童B作品①）

Bの家の周辺。左上はよく従兄弟と遊ぶ公園の砂場と滑り台、右上の駐車場には車が数台。マンションの5階がBの自宅。木は説明なし。左端に車。人は左から、「近所を歩いている人」、「マンションに住んでいるおばあさん」、「同じ階のおじさん」。所要時間約40分。

#### 2) 印象

画用紙の中央には空白が目立ち、空虚な印象。普段の、いたずら好きで暴れん坊、というBの姿は影を潜めている。近景は大きさが考慮され、写実的に描こうとしていることがうかがえるが、上部にポツリと描かれた公園や駐車場の位置が平面的で、不思議な印象を受けるが、これは発達段階の特徴とも考えられる<sup>(18)</sup>。これらが描かれたことから、友人が少なく、同郷の従兄弟と遊ぶ公園や駐車場は、その寂しさを紛らわす場であること、また、これらが教示の課題から離れて描かれたのは、その思いが不在の多い家族への思いと重なり、自らの中で統合しにくかったとも考えられた。歪んだマンションの概観は、Bの家庭の心象とも捉えられ、固さや冷たさを感じさせる。木々の幹は細く、地面には根付いておらず、奇妙な樹冠からは安定感や健常で豊かなエネルギーを感じにくい。

#### 3) フィードバックと地域支援者との協働

Bが家庭生活に寂しさを感じていること、友人関係の不毛さが想像されること等を伝える。担当者らからは、家族関係では、父親と兄が夜間の仕事に従事しておりBとの関わりが少ないことと、母親と長姉が共に妊娠中で秋に出産予定であること、学校の問題では、喧嘩等のトラブルが絶えないことが報告される。また、家族が増えれば、両親からBへの配慮がこれまで以上に欠如することも話題となった。さらに学習面では、今後、能力的に

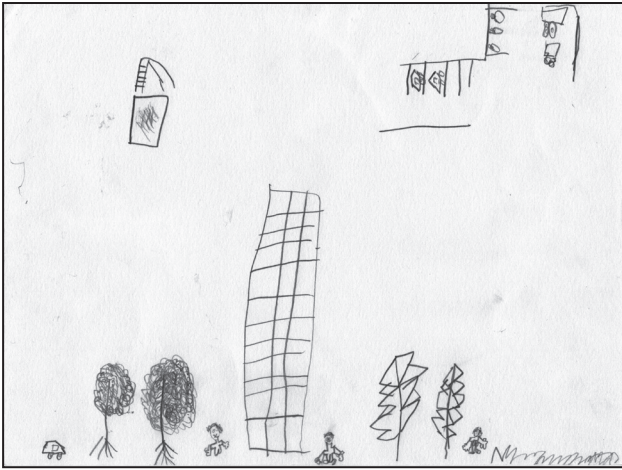


図6 児童B作品①

大きな壁にぶち当たることが予想されること等が話し合われた。以上から、支援方針では、学習支援に加え、Bの学校や家庭に関する語りを傾聴し、支援教室がBにとって落ち着ける空間となるような雰囲気作りや配慮を実施することとした。

**エピソード1：**X年6月中旬から母親、2ヵ月後に長姉が、共に出産のため渡米し、長期不在が続いた。父親もX年10月下旬から渡米予定であった。

## 【2回目：X年10月下旬】

### 1) 描かれた絵の風景と課題の説明（児童B作品②）

「下書きしてから」と、持参した小型ゲーム機で構図を考えた。Bの家の周辺。上段には高層の建物が並び、左から3軒目が自宅マンション。左の2つの建物の間に花壇、右端に自転車置き場と自転車。中央を横切る広い道路の上部に街路樹。道路とマンション前の歩道を往来できるよう、道路の描線を3ヶ所消しゴムで消した。人は2人、左は「掃除をしている人」、右は「知らん」。下段右端の建物は老人ホーム『△』、その左側の横線入りの建物はマンションで、「高校生や大学生が住んで、△の人を守ってる」。左端は保育園。園児2人と運動場の砂場。施行中、筆者と話したが、「俺が描いている間、先生やっという」とゲーム機をやり取りする、立ち歩く等、集中力が続かず、相当の促しが必要であった。所要時間約1時間。

### 2) 印象

無機質で淋しさが漂う。高層建物群の一角に描いた自宅と家族以外の人物が描かれたことは、家族の不在がBに家庭の温かみの感覚を薄れさせ、家族を描くことの困難さとリアルな表現への防衛を招いたと考えられた。街路樹の木々は貧祖で吹けば飛ぶよう。道路に作った隙間と自転車は、時間も場所も制限されず、自由にこの風景上を往来できるBの身軽さと同時に、寂しさをも感じさ

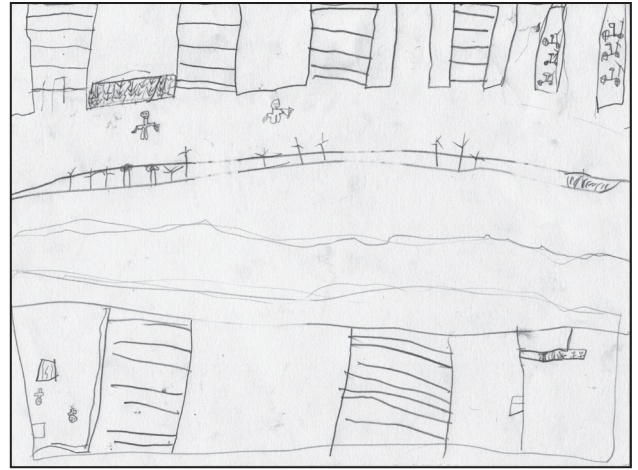


図7 児童B作品②

せる。そのためか、老人施設や保育園を描き、人恋しさを感じさせた。PDIからは、老人・幼児といった社会的弱者に対する優しさがうかがえた。

### 3) フィードバックと地域支援者との協働

荒涼とした風景に、第1回目よりさらにBの孤独が感じられることを伝える。担当者からは、家事を担う母親と長姉の渡米後、Bが父親から与えられる小遣いで玩具や好きな食料を買う生活を続けていること、夏休み頃から、深夜までゲーム等をして過ごす、夜遅く兄らと出かける等で生活が乱れ、学校の欠席が増え、Pも休みがちであること等が報告される。また、支援教室では、他の子をかからかう、立ち歩きが多い、口の利き方が乱暴等の指摘があった。支援方針では、日本に残っている家族との連絡を緊密にし、学校や支援教室での様子を伝え、Bにとって学習や基本的な生活習慣が重要であり、そのための配慮をできるだけして欲しいとの要望を伝えることとした。また、母親が帰国するまで、P全体でBの現状を理解、受容するよう努めること、支援教室での乱暴な言動には、教室の枠組みを崩すことなく、他の子どもたちに迷惑が及ばない範囲で保護的に関わり、温かく見守ることとした。

**エピソード2：**担当者が生活を心配し、食事を作って持たせるようになった。Bは渡されるままに持ち帰っていたが、郷土料理を渡された際、初めて礼を言った。

**エピソード3：**父親が母親と赤ん坊を迎えに渡米し、約1.5ヶ月間の滞在後、X年12月中旬、両親と赤ん坊が帰国。規則的な生活に戻ったと考えられた。

## 【第3回目：X+1年1月下旬】

### 1) 描かれた絵の風景や課題の説明（児童B作品③群）

3作品が描かれ、所要時間は約50分。

作品③-1：家を描くのに定規を使いたいと言い、了解した。描き始めると、家が大きくなりすぎ、他の課題



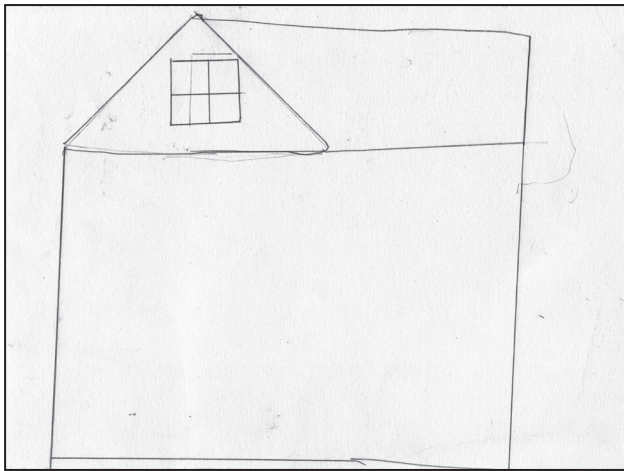


図8 児童B作品③-1

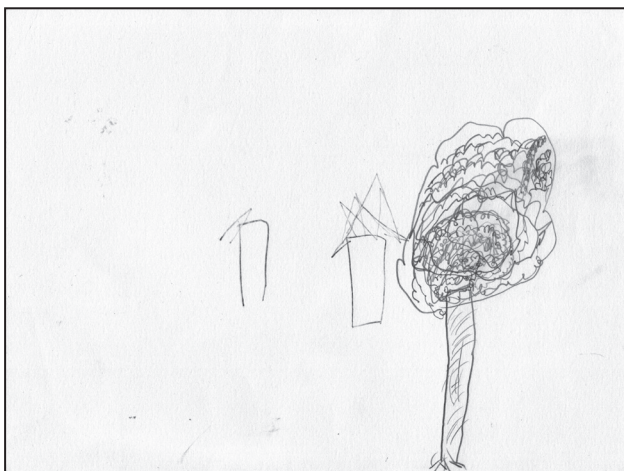


図9 児童B作品③-2



図10 児童B作品③-3

が描けなくなったため、画用紙をもう1枚要求した。

作品③-2: 最初に家を描く。将来Bと家族が住む米国の家。表札には名字を書く(削除)。壁にレンガを描いていたが、時間がかかると言って消した。家が大きかったのか、「あ、木が描かれへん」と言い、作品③-1の画用紙の裏面に木を下書きし(図9)、表面に戻った。

作品③-3: 力を込めて描いたため、腕が痛いと言った。「普通の木、葉っぱのある木」。枝は最後に描き足し、「迷路みたいになった」。人は男性で、コンパスで顔を丸く描こうとしたがうまく描けず、手で描いた。

## 2) 印象

各課題が大きく描かれ、ようやく身近に感じられる。中央の家の窓の多さは、対人交流に開かれ、一人遊びの孤独から抜け出したこと、煙突は家庭の温かさを感じさせる。表札はBの具体的な夢を垣間見せる。木の幹は太く根付いているが形態は歪んでいる。樹冠の葉と輪郭をびっしり描いたが、筆圧が不規則で、エネルギーをうまく放出できない苛立ちを感じさせる。枝の先端は太く角ばり、柔軟さや繊細さが感じられない。人は手足の長さや胴体から、自己主張の強さと心の不安定さの両個性を感じさせる。また、宙に浮いているようにも見え、地に足がついていない、といった文字通りの意味を彷彿とさせる。

## 3) フィードバックと地域支援者との協働

筆者らは、家族全員での生活が再開された喜びが感じられる一方、対人交流は未だ不器用で、学校等の生活面で苛立ちや困難を抱えがちであることが想像されると伝える。担当者からは、年明けから乱暴な言動が減り、落ち着いて過ごせるようになったこと、赤ん坊の面倒をよく見ていること等が報告された。しかし、母親が育児を手伝わせていることが懸念された。支援方針では、進級に備え、学習支援を強化すること、特に日本語学習を重視することとする。また、Bが健全な学校生活を送れるよう、家族と密に連携し、Bに家事の負担をかけないよう依頼することとした。

**エピソード4:** 母親が仕事を再開するため、赤ん坊を保育所に預けることになったが、その手続きの際、Bが通訳として付き添い、学校を欠席することがあった。

## 【児童Bへの支援過程と心の風景】

家族のすれ違いの多い生活、国をまたぐ移住の多さ、両親の子どもたちの生活や教育への関心の低さは、Bの落ち着きのなさや粗暴な行動の負の要因と考えられた。また、兄も義務教育終了後、父親らと同じ工場労働者の道を歩んでおり、身近な男性モデルである父と兄の姿からは、明確な将来像を持ちにくいことが考えられた。また、日本語によるコミュニケーションへの苦手意識が強く、言葉で表現できない苛立ちが重なり、感情が高ぶると、短絡的で粗暴な行動をとる傾向が強いことが考えられた。その結果、自由な自己表現への尻込みや、間違いや評価を気にする萎縮と慎重さを招き、毎回課題を下書きする様子が、それを如実に表していると考えられた。また、Bの日本語能力では、今後、相当の困難が待ち受



けていることが想像された。

作品①は日常生活の空虚感と捉えられた。絵全体は無機質でどこちなさをも感じさせる。自宅マンションの建物からは家庭の温かさや安心感が伝わってこない。そのため、付加物として描かれた公園の砂場やすべり台は同郷の親類とコミュニケーションの取れる場所であり、友人の少ないBにとって、人と関わることのできる貴重な場所であるのかもしれない。支援教室で見せる粗暴な行動は、構って欲しいという無意識の愛情希求と考えられた。そのため、大人たちからの注意に対する悪態や聞き分けの悪さは、素直に甘えることができないBの照れ、子どもっぽい心情の屈折した表現であるとも考えられた。作品②は家族の不在による一層の寂しさの表れと考えられた。母親の長期不在による生活の乱れはBの心の乱れそのものであるように感じられ、縛りのない自由な生活を送りながら、次々と購入する新しい玩具は、一時的な欲望を満たすだけですぐに空虚感に襲われ、教室での乱暴な行為や落ち着きのなさに繋がっていったと考えられた。作品③はそれまでの作品とは一変し、家族への愛着が感じられた。レンガを描こうとした家は温かさの表現と捉えられ、Bと思われる人物が家のすぐ隣に描かれたことから、Bが心の拠り所である家族を取り戻し、家族全員で生活することへの嬉しさ、充実を感じていることを想像させた。しかしながら、赤ん坊の誕生により、両親からの教育及び心理面への配慮が今後も期待できないことも危惧された。さらに、木の形態は、Bが支援教室で時折見せる対人コミュニケーションへの困難が感じられ、学校適応等に必要な対人関係スキルへの支援の必要性を感じさせた。

描画作品には、回を重ねる毎にBの内面がより深く表現され、見守り手である筆者との関係も深まっていくように感じられた。フィードバックでは、描画を通じた筆者らのBの心の問題への見立てと、担当者の支援活動に基づく印象や感想を話しあうことで、Bの課題が支援者間で共有された。このような支援の協働により、Bが問題を起こした際の対処法やPと家族との関わりが、関係者らの間で工夫されるようになった。

## V 質問紙調査の結果

筆者らの支援の評価を知るため質問紙調査を実施した。実施時期は描画法導入後1年を経過したX+1年5月末で、対象は査定対象の子どもの担当者とコーディネーター(N=12)であった。質問は、選択式質問項目(5件法)では、訪問頻度、描画テストの方法・回数・時間帯、フィードバックの回数や時間・内容・方法について、記述式質問項目で、描画テストの実施とフィードバックへの感想等への回答を、それぞれ求めた。

結果から、訪問頻度、描画テストの方法と回数は一定

の評価を得たと考えられた(図11, 図12, 図13)。その一方で、実施の時間帯や時期については、本来の支援活動を優先し、考慮する必要があったと考えられた(図14)。フィードバックはある程度の評価を得たと考えられたが(図16)、個人情報に鑑み、担当者とコーディネーターのみに実施したため、P全体での情報共有や支援方針を話し合うための時間の拡大等が求められ、今後の課題としたい(図15, 図17)。また、記述式質問項目からは表1のような回答を得た。

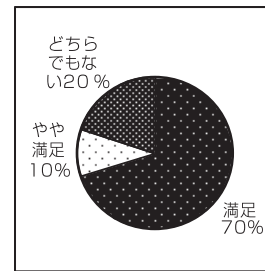


図11 訪問頻度

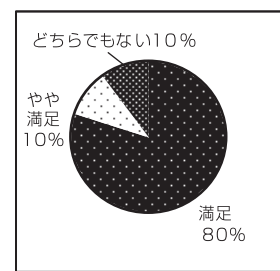


図12 描画テストの方法

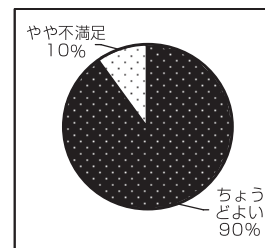


図13 描画法の回数

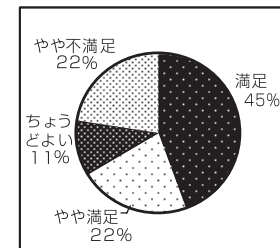


図14 実施時間・描画時間

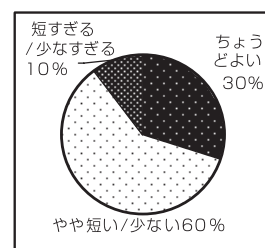


図15 フィードバックの回数と時間

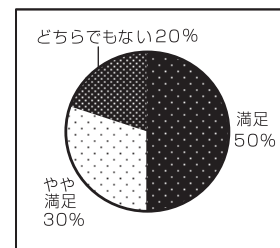


図16 フィードバックの内容

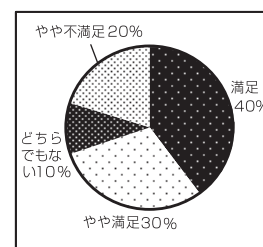


図17 フィードバックの方法

表1 心理査定とフィードバックの感想のまとめ

- 描画で子どもの心の状態や問題を把握することで、より良い支援ができるようになったと思う。
- 子どもの生活を、こんな感じかな？と漠然と捉えていたが、確信を持って見られるようになった。
- 思っていた以上に子どもが自分や周囲のことを冷静に見ていることを感じた。
- 自分が与える影響を考えて接するようになり、同時に、自信をもって関わるができるようになった。
- 筆者が普段の活動を通じて子どもたちと接していたことで、描画テストを実施することができたと思う。
- 筆者が一方的に描画の説明をするのではなく、一緒に考え、意見を聞いてくれ、安心感が大きかった。
- 対処がわからない時に親身になって対応してくれ、「変化」に対するアンテナが個々人にも高まり、ボランティア間で話し合う内容も具体的になった。
- P全体で描画について話し合う機会を持ちたい。
- 子どもの心の状態が見えても、自分が何をすべきか、保護者とどう協力すればいいのかが難しかった。
- 筆者らの立場を支援教室の中で明確にさせる必要があるのではないかと思った。

## VI 考察

### 1. ニューカマーの子どもの心の問題

異文化への移住は多くの喪失を伴う<sup>(19)</sup>。喪失の対象は人的及び社会的資源等多岐に及ぶが、子どもの場合、受動的な移住がほとんどであるため、その喪失体験は成人のそれよりも深く心に傷を残すことが考えられる<sup>(20)</sup>。小論においても、移住によって生じた心の問題が見られ、それらの要因は、言葉、学力、家族関係、発達心理学的問題、アイデンティティ等に大別されよう。

言葉と学力の問題では、日本語能力の欠如が学力と学校での対人コミュニケーションの問題に直結することは想像に難くない。小論の支援活動でも、日本語と教科学習の能力は支援者らの間でも大きな課題であった。そのため、彼らが学校生活で自信を喪失し、本来の能力を発揮できず、苛立ちや悔しさ、諦め等の感情を日々感じていることが想像された。家族関係では、児童Aは、両親の離婚、母親の渡日といった、幼少期の親との離別という喪失体験に加え、自身の日本への移住により、住みなれた土地から根をひきぬかれるような悲痛な感覚、根こぎ感<sup>(21)</sup>を抱えていることが考えられた。日本での生活では、母国の生活習慣、言葉、社会規範が通じず、自身の異文化性を強く感じていたことが考えられる。しかしながら、良好な母子関係と本人の真面目で明朗なパーソナリティが、学校適応を助け、大きな問題を起こすことなく過ごしてきたことが推測された。一方で、母親とのコミュニケーションの時間的少なさが、精神面での強い

母子一体を生んでいるようにも感じられ、将来への不安が共依存関係を育んでいることも推測された。児童Bも同様に、両親とのコミュニケーションが不足しており、加えて両親の不安定な養育態度が、Bに、自分はどこの国の人間で、将来どこで暮らしていくのか、という将来展望と確固たる文化的アイデンティティの持ちづらさを与えていた。加賀美<sup>(22)</sup>は、親の自文化アイデンティティ喪失の脅威が、子に自文化のアイデンティティ保持を促す一方、子世代はホスト文化（同輩集団等）への同一視を重視するため、世代間葛藤が生じる可能性があるとしている。小論の2事例の場合も、子どもたちは母語よりも日本語が優位になりつつあることから、家族との意思疎通の問題と母語保持を切望する家族員の期待による心理的な葛藤が懸念された。

小論の子どもたちには、深刻な精神病理や不登校等の不適応課題は見られなかった。そのため、児童Aの支援では、発達心理学的な問題として前思春期にみられる心身の成長に伴う変化と課題を、本人が徐々に受容していくための心の支援を目標とし、実施した。また、児童Bは、日本での生活は長いものの、文化をまたぐ移住の多さにより、文化的アイデンティティの揺らぎ、根無し草のような感覚が、物心ついた頃から心の奥深くに漂っているように感じられた。日本人から、日本人と思われた際のAの様子や、自分を「アメリカ人だ」と自慢げに言うBからは、欧米系外国人への羨望を抱く日本人の古く偏った外国人観が、日系南米人として日本で生きる過程で、彼らに文化的マイノリティとしての自尊感情の傷つきを与えてきたことが想像された。

昨今のニューカマーの子どもの増加は、日本の学校文化に質的变化を呼び起こし、結果、文化的マイノリティとしての彼らへのいじめや、不就学等の心の問題の深刻化が危惧されている<sup>(23)</sup>。今後、彼らの支援では、メンタルヘルスへの対応も含めていくべきである。

### 2. コミュニティ心理学的アプローチの実践

地域支援団体Pの支援者らは、子どもたちの心の問題を感じながらも、直接的な働きかけができず、もどかしさや、支援者としての力不足を感じていた。小論で実践された、心理臨床家と地域支援者による支援の協働は、地域支援団体に子どもたちの心の問題への気づきを促し、「心の支援」という新たな支援の方向性を提案したと考えられる。この過程は、コミュニティ心理学的アプローチの一形態であるといえ、以下にその過程を検証したい。

#### 1) アプローチ方法と支援内容

本研究の地域支援団体Pは、ニューカマーの子どもをはじめとする、異なる文化的背景を持つ子どもたちへの言語及び学習支援を主眼とし、団体を立ち上げて4年以



上が経過していた。そのため、心理臨床家が心の支援という新たな支援方略を持ってその支援活動へ参入するためには、まず、対象となるコミュニティの支援ニーズを把握することが必要であろう。さらに、地域支援者との協働による支援形態の構築が可能か否かを見極めねばならない。その上で、本研究のように、コミュニティから依頼があった場合でも、心理臨床家の専門性と心の支援の有効性を明確に説明する必要があると考える。筆者らの実践では、非専門家にも伝わりやすい描画テストという臨床心理学的手法を導入し、それらを共に感じ、考える過程を提案した。これにより、支援者らの関心を子どもの心の問題に向け、専門家としての考えや見立てを伝えることで、心理臨床家の専門性を伝えることができたと考える。筆者らにも、描画を通じて、子どもと担当者、また、筆者と子どもとの関係性が深くなっていくように感じられた。また、担当者と子どもの関係性、子どもとその家族の生活実態も実感できた。さらに、支援者側からの情報提供により、子どもに問題があると考えられた場合、保護者とも情報を共有し、支援方針を話し合うことができ、それにより、支援者間の信頼関係が育まれ、心の支援の協働が徐々に根付いていったと推測される。

## 2)方法と「場」

臨床心理学および精神医学の分野で、臨床現場で心理査定を実施する場合、施行時の「枠」が重要な観点であることは言うまでもない。被験者が心の内を吐露できる守られた環境と信頼できる見守り手が施行時に必要とされる。本研究のS-HTP法の施行を顧みると、複数の支援者、子どもたち、臨床心理士が混在する支援教室内で実施するという、独特の「枠」の存在が指摘できる。しかしながら、事例の作品群からは、子どもたちが自らの心の風景を、制限を感じることなく自由に表現していることがうかがわれる。支援教室という場の機能について、田中<sup>(24)</sup>は、外国人の子どもと関わる語学ボランティアのような支援者との連続性のある関わりは、子どもに受け入れられているという体験を提供し、安心した中で喪失体験を抱える自分の気持ちと対峙し、「喪の作業(mourning)」<sup>(25)</sup>を通過できると述べている。Pの子どもたちは休暇中も休まず支援教室に通ってくる子が多い。ここから、支援教室が同郷の子どもや他の日本語が不自由な仲間が集まる、自分たちの異文化性を強く意識させない場所であり、「喪の作業」が必要な彼らに居場所を提供していると考えられる。そのため、担当者、もしくは筆者との関係性の下、小論の作品群が描かれたことは、子ども一人ひとりがその存在を受容され、見守られているという安心感の下、自分を表現できる場としての支援教室の役割の大きさが示唆されたといえる。

## 3) コミュニティの特性

本研究の地域支援団体Pの特性として、子どもと支援

者の1対1での支援形態があげられる。この支援形態は各支援者に、子どもの心の問題への気づきとラポールの形成を促す働きがあったと考えられる。つまり、子どもへの臨床的な関わりのための土壌がすでにあったといえ、そのため、「心の支援」という枠組みがスムーズに導入されたと考えられる。また、外国人在住者が伝統的に多いという地域性もPの立ち上げの動機の一要因として働き、子どもたちが、同じ地域住民として支援者たちに受け入れられていたとも考えられた。

一方、Pの特性を省みると、筆者らのアプローチが他の地域支援団体においても応用可能か否かは検討する必要があるといえる。つまり、心理臨床家が地域支援団体に支援者として参入する際、対象となるフィールドの見立て、つまり、コミュニティの支援ニーズ、地域支援者らの能力と支援へのモチベーション、支援対象者の特性、地域性等を的確に把握する必要性があげられる。加えて、心理臨床家が参入手法の限界を心得なければ、支援組織本来の支援活動を損なうことも考えられる。そのため、臨床心理的地域援助では、地域の既存支援組織の体質を活かした参入方法を探り、協働的支援の枠組みを提案することが重要であろう。

## 3. コミュニティ心理学的アプローチの意義と評価

山本<sup>(26)</sup>は、心理臨床家が地域での社会的支援組織に専門家として参加する方法の多様性を論じ、その中で、ボランティアなどの非専門家と共同して支援活動する際の考え方として、第一に、支援対象者の環境を整えることを主眼とした、専門的知識と技術の要請による介入、第二に、組織のオルガナイザーとして中心的支援者らにコンサルテーションを行う、協働の治療者としての支援活動、第三に、社会制度に働きかけ、現存する機関や社会資源を有効に利用するための現実的な組織アプローチの実行、をあげている。

本研究をこれらの視点から検証すると、第一の点では、筆者らが子どもたちの心の問題への対応に苦慮する地域支援団体からその専門性を求められ、支援活動に参入している。また、その際、支援団体そのものをアプローチの対象と見立て、支援者らに子どもたちへの心の支援の必要性を促している。これは、第二の点にあたると思われる。この成果は、X県内の外国人支援団体の集まりで、子どもたちの心の問題への取り組みとして広報されたものの、彼らのより良い生活のために団体をエンパワメントし、現行の社会制度に働きかけるまでには及ばず、第三の点については問題提起の段階に留まっている。

本研究を通じて、心理臨床家による地域支援者との協働的支援活動が、地域支援団体に子どもたちの心の問題を積極的に意識化させ、定期的に話し合える土壌を作ったこと、さらに、支援資源としての臨床心理士の活用を

根付かせことがうかがえ、緩やかな心の支援の枠組みが醸成されたといえる。この一連のアプローチは、臨床心理的地域援助における応用可能な一モデルになりえるものであり、意義深いと考える。

## 結 語

本研究から、ニューカマーをはじめとする異なる文化的背景をもつ子どもたちにとって、日本語ボランティアのような地域支援者らが「隣の身近な大人」として、彼らの心の支援の一端を担う人的資源であることが明らかになった。そのため、地域支援者が、支援者自身の存在と関わりの意義を意識した支援が実施できれば、より効果的な支援が可能となると考える。今後、子どもたちの支援方略を考えていく上で、地域の既存支援組織とその体制を活かす支援体制の構築と、その取り組みの中で彼らの生きる意欲を汲み取り、自助資源を育むための、臨床心理的地域援助の視点に立った心理臨床家による支援の必要性を述べたい。

## 一 文 献

- (1) 駒井洋編『新来・定住外国人がわかる辞典』明石書店, pp.16-17, 1997
- (2) 志水宏吉・清水睦美『ニューカマーと教育：学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店, 2001
- (3) 宮島喬・太田晴雄『外国人の子どもと日本の教—不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会, 2005
- (4) 児島明『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房, 2006
- (5) 佐久間孝正『外国人の子ども—不就学—異文化に開かれた教育とは』勁草書房, 2006
- (6) 朝倉隆司「日系ブラジル人児童生徒における日本での生活適応とストレス症状の関連—愛知県下2市の公立小・中学校における調査から」『学校保健研究』46, pp.628-647, 2005
- (7) 掛札綾「日系ブラジル人生徒のメンタルヘルスに関する研究—異文化要因の影響からみた学校生活適応におけるリスクファクターについて」『こころと文化』3(1), pp.67-72, 2004
- (8) 田中ネリ「在日ラテンアメリカ人の子ども—その背景と支援」『異文化間教育』20, pp.29-39, 2004
- (9) 竹山典子・葛西真記子「日本の公立小学校における外国人児童への心理的支援—取り出し指導と学級における支援からの一考察」『カウンセリング研究』40, pp.324-334, 2007
- (10) 野山広「地域支援ネットワークと異文化間教育—日本語支援活動に焦点を当てながら」『異文化間教育』18, pp.4-13, 2003
- (11) 杉岡正典・児玉憲一「滞日日系ブラジル人児童生徒支援のための支援ネットワークの試み」『コミュニティ心理学研究』11(1), pp.76-89, 2007
- (12) 三上直子『S-HTP法—統合型HTP法の臨床的・発達のアプローチ』誠信書房, 1995
- (13) 箕口雅博・斎藤雅彦「HTP描画法からみた適応過程」江畑敬介・曾文星・箕口雅博(編)『移住と適応—中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究—』日本評論社, pp.301-322, 1996
- (14) 田中ネリ・阿部裕・井上孝代・岩木エリーザ「S-HTPでみる在日外国人児童のこころ—ボリビア人児童との比較」『明治学院大学心理学部附属研究所紀要』5, pp.15-31, 2007
- (15) 箕浦康子『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房, 1999
- (16) (12) 再掲
- (17) 高橋雅春『描画テスト入門—HTPテスト』文教書院, 1974
- (18) (12) 再掲
- (19) 渋谷田鶴子「異文化体験と心の癒し」『現代のエスプリ』318, pp.200-206, 1994
- (20) 田中ネリ「在日ラテンアメリカ人の滞在長期化と帰国の動向—神奈川県で実施したアンケート調査を通して」『こころと文化』2(2), pp.179-186, 2003
- (21) Erikson, E. H. *Insight and responsibility*. New York: W. W. Norton & Company, 1964. 鎌幹八郎訳「現代における同一性と根こぎ感」『洞察と責任—精神分析の臨床と理論』誠心書房, pp.75-104, 1971
- (22) 加賀美常美代「文化移行を伴う生徒の予防的共働的援助—こころと学校コミュニティ」『こころと文化』5(1), pp.35-41, 2006
- (23) (20) 再掲
- (24) (8) 再掲
- (25) Bowlby, J., *Attachment and loss, vol. 3 Loss: sadness and depression*, London: Hogarth Press, 1980
- (26) 山本和郎「自閉児に対する地域支援活動—コミュニティ心理学の立場からの展開の事例」『コミュニティ心理学—地域臨床の理論と実践』東京大学出版, pp.148-173, 1986